

ミカンナガタムシ

○ 被害と発生生態

カンキツ類だけを加害する。寒害や干ばつ、高接ぎ等で樹が衰弱した園や管理不良園で発生することが多く、被害にあった枝や幹はひび割れたり、樹脂を流して枯れ、甚だしい場合は枯死する。放置すると被害は急速に拡大する。

成虫は、6～10 mm程度の小型の甲虫で、6～9月に幹にかまぼこ形の穴を開けて脱出し、葉を鋸歯状に食害した後に幹に産卵する。幼虫の胴部は扁平・乳白色で、各節でくびれる。老熟幼虫の体長は15～20 mmに達する、主に樹皮下の形成層を食害する。発生は年1回である。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・被害樹、被害枝は切り取り、4月までに処分する。
- ・適切な肥培管理や灌水、有機物の施用等により、樹勢を落とさないよう心がける。
- ・高接ぎ樹には日焼け防止対策を行う。

(イ) 薬剤防除

- ・成虫の発生直前（5～6月）に樹幹及び主枝に殺虫剤を塗布または散布する。
- ・葉の食害及び成虫の脱出口が認められたら、成虫最盛期（6～7月）及び若齢幼虫最盛期（7～8月）に樹全体に殺虫剤を散布する。



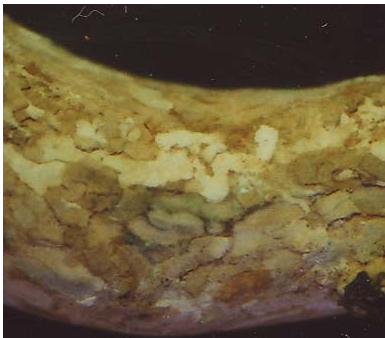
成虫(6～10 mm)



成虫による葉の食害



幼虫(15～20 mm)



幼虫による形成層の食害跡



成虫の脱出口

